

乃木長門は勇者である

月影桜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神に見初められた無垢な少女達と一人の少年の物語――

目次

鷺尾須美の章

はじめり	1
しゆくしようかい	32
がつしゆく	45
しんじつ	67
ともだち	86

鷺尾須美の章

はじまり

前から引つかかっていた事がいくつもあつた。

例えば「大赦」という名前。一体何から赦しを貰つたのだろうか？

これは疑問ではない。半ば確信めいていて。

■が許しを請う相手なんて相場が決まっている。

きつと■に対してなのだろう。

8年 乃木長門記

勇者御記 29

朝4時30分、まだ皆が寝静まっているこの時間に、まさに豪邸というべき荘厳な見た目の家の一室で小さくアラームの音が鳴った。

「ふあ……。この時間に起きるのは慣れてはいえ、眠いには変わりないな……。」

そんなことをぼやきながらいつも通り洗面台で顔を洗う。鏡に映るのは、黒髪で右目の右下にあるほくろが目立つ端正な顔立ちだが、周囲からもしじられる程の女顔の少年。その事実を改めて溜息をつきつつ、木刀を持って庭に出る。

まず走りこみをして、その後木刀を持ち、型の確認をして汗を流す。これが俺——
乃木長門のぎながとの朝の日常だ。

シャワーを浴びたら学校の準備をする。今は6時30分。今起きても余裕で間に合うほどだ。本当は朝食の手伝いをしたいが、この家には使用人がたくさんいるためやらせてもらえない。まあ他人の仕事を奪うのもどうかと思ったから、すぐに引き下がったが弁当だけは自前だ。とはいっても俺の通っている学校は、週一で弁当持参ののだが。

やることなくなくなって珈琲を淹れて飲んでみると、時間は7時を過ぎる。飲み終わったカップを机に置き、ある部屋へ向かう。

一応起きているかノックをして確認してみる……。しかしやはりというべきか反応はない。彼女はいつもこんな感じだから、もう慣れた。

「おーい、園子。朝だぞ」

そう声をかけながら部屋に入る。女の子らしくぬいぐるみの多い部屋で、部屋の主は今もすやすや寝ている。

声をかけるだけでは彼女は起きない。彼女の肩に手を置き、揺する。こうすることで、彼女は寝起きは悪くないので起きるのだ。

「なつくんがサンチヨになっちゃった……。ん？ ……何だ夢かあ、ふあ」

意味の分からないことを寝言で呟きつつ、大きくあくびを欠きながら起きた少女は、俺の幼馴染でもあり今は家族でもある乃木園子だ。

何年も一緒にいるが、今でも時々意味の分からない発言をする彼女の自由さには、むしろ尊敬の念を抱くまでである。

「起きたんなら顔洗えよー、朝食ももう出来てるみたいだしな」

俺がそう言うと、彼女は「はーい」と気の抜けた返事を返してくる。なんやかんや意外と余裕をもって学校へ登校できる。

と言うか車を出してくれるので早く着く。俺は申し訳なくて、一人で歩いて行こうと断ろうとしたのだが、園子がどうしてもというので甘えさせてもらっている。俺は養子として乃木家に入ったから未だに庶民感覚が消えていない。

学校へ行く道中の車内は静けさを保っている。別に園子と仲が悪いわけではない。気分次第で、たまには無言になるときがあるのだ。でも気まずくはなく、そんな無言の時間が好きだ。そんなことを考えていると俺たちが通っている神樹館小学校に着く。

神樹館小学校はかなりのお嬢様学校で、それを聞いたときは普通の小学校にしようとしたが、園子に上目遣いで頼まれてしまったのは拒否権はなくなつたようなものだ。お兄ちゃんたるもの妹には甘くなってしまう。同い年だけだな！

そんなわけで使用人の人にお礼を言いつつ教室へ向かう。

教室に入るとまだ人は少なくがらがらだ。俺と園子は偶然にも同じクラスで席が隣だ。知らない奴と隣になるのは面倒だから助かったけど。

彼女は自分の席に着くなり「なつくんおやすみ」と言っていていきなり寝始めた。いつものことなので放っておく。先生が来るまでこうして自分の席でどうでもいいことを考える、この時間が好きだ。ランドセルから本を取り出して読み始める。

そうしていれば中々声をかけてくるやつはいないと思つて前々からやっているがかなり効果がある。……違うな。イヤホンしてるからか。しかしその防衛網を突き破る、凜とした心地の良い声が耳朶を打った。

「おはようございます。乃木君」

礼儀正しい挨拶をしてくれたこの娘の名前は鷺尾須美。かなりまじめな性格をしている大和撫子な女の子だ。

そして何よりも特徴的なのはクラスの中でダントツと囁かれる胸である。……肩凝りとか大変そうだ。他意はない。

いわゆる優等生だが、ある事情で学級委員ではなく並ばせ係だ。かなり怖いけど。し

かし怒った園子に比べたら何倍も優しい。そんなどうでもいいことを考えながら、イヤホンを外して挨拶を返す。

「おはようさん。鷺尾さん」

なんか韻を踏んだみたいになったが、故意じゃない。多分、きつと。それに後々のことを考えたら、少しは砕けていったほうがいいだろう。そんなことを考えつつ彼女を見ていると、逃げるように自分の席へ行った。

いつもこうなんだよなあ。理由は察せるけど。おそらく鷺尾さんは、俺の他人との距離の測り方と観察するような目が苦手なのだろう。だがある事情で、それなりには親睦を深める必要があるから困っている……。ま、そんな感じなんだろう。

「zzz..... あわわっ！ お母さんごめんなさい！」

唐突に園子が飛び起きて、顔の前で両手を合わせている。俺とは逆側の園子の隣の席に座っている鷺尾さんが、呆れた顔をしている。

「あれえ……？ 家じゃない……」

つくづくマイペースな奴だ。さつき車に乗ってきただろ。と言おうと思つたが、どうやら鷺尾さん家の須美さんが代わりに言ってくれそうなので読書に戻る。

「乃木さん、ここは教室で朝の学活前よ」

「えへへ……。おはよう々鷺尾さん」

「おはようございませす」

うちの園子がいけませんね。と心の中で呟くと、俺たちの担任である安芸先生が挨拶しながら入ってくる。

「はぎーすつ！ ふう……。ま、間に合った」

「三ノ輪銀さん。間に合っています」

慌てた様子で一人の少女が駆け込んできて、いつも通り安芸先生に名簿で軽く頭をたたかれる。その光景を見ていたクラス全体に笑いが広がる。この子は三ノ輪銀。底抜

けに明るく、クラスの人気者であるが何故か遅刻が多い。理由は想像がつく。まあ彼女とはそれなりに話す仲ではあるが、話しているときの周りからの羨望の眼差しは勘弁してほしい。

「ミノさんは相変わらずだな」

三ノ輪は席に着くと、隣の席の人に事情を聴かれ、小さい声で「6年生にもなると色々あるんさ」と返していた。

なにそのセリフかっけえな。俺遅刻したら使おう。絶対遅刻しないけど。「教科書忘れた……」教科書なら必要ないから貸すまである。

と言うか授業めんどいから受け取ってほしい。いけない、本音が出てしまった。いや心の中だから出てはいないか。

「それじゃあ。今日日直の人」

「はい！ 起立、礼」

『神樹様のおかげで今日の私たちがあります』

「神棚に礼」

そうこれだ。俺がこの世界について気になっている事の一つ。あまりにも道德教育が行き届き過ぎてている。確かに神樹のおかげで世界は回ってるんだが……。……俺の悪い癖だ。すぐ目に止まる現象や人間に対して懐疑的になる。鷲尾さんの合図で着席しようとしたとき、世界が止まった。ついに始まるのか……。……あらかじめ聞かされていた俺たち4人は、あたりを見回す。

「思ったよりも早かったな」

「これって……」

「来たんだ。私たちがお役目をする時が」

すると突如まぶしい光に包まれ、思わず目をつぶる。

目を開くとそこは教室ではなく、どこか神秘的で不思議な空間へと変わっていた。

「初めて見た〜これが」

「神樹様の結界……………」

ここは鷺尾さんの言った通り神樹の結界の中で、実際に来るのは初めてだ……………。

俺たちは、ここであるお役目をしなければならぬ。3人が色々感想を言っているの
で、一応周りの警戒も兼ねてスマホを取り出す。

「私たちが勇者かあ。興奮するうー！」

「三ノ輪さん、遊びじゃないのよ」

「分かってるって」

なにやら興奮している三ノ輪さんを、鷺尾さんが窘める。

「あそこ見て！」

園子に言われた通り目をやると、大橋のところは無機質な生物がいた。これがバー
テックス……………。神樹を狙ってやってくる人類の敵だそうだ。

「あれが敵か〜」

そう言いながら、バーテックスを写真に収める三ノ輪。いや、君リラックスしすぎじゃないですかね。同じことを思ったのか、鷲尾さんがなにか言いたそうにしている。

「あいつが神樹様にたどり着いたとき、世界がなくなる……」

「ああ。分かっているって」

「私たちが止めないとだね！」

「お役目を果たしましょう」

鷲尾さんの言葉に全員頷く。そしてアプリを起動し、祝詞を唱える。

すると鷲尾さんは弓、三ノ輪は双斧、園子は槍と各々武器を持ち勇者装束に変身する中、園子がこちらを見て言う。

「わ〜、なつくんの服かっこいいね〜」

全身黒づくめなのに？ 俺が読んだラノベで確かこんな装備をしていた主人公がいたような……。違う点としては、俺は和風な感じになっっている事くらいか。俺としては武器の日本刀のほうをカッコいいと言ってほしかったよ、園子さん。

「そうか？ それより今は敵に集中するぞ」

そう言うと園子は引き下がってくれた。あのままだったら、園子の装束の感想を言わされるところだった。園子は可愛いから何着ても似合うんだが、それを口にするのは年頃の男子として恥ずかしいものがある。察してくれ……。

「お〜！ 初めての实战！」

「合同訓練はまだだったけど……」

「敵がご神託より早く出現してしまったから」

「まあなるようになるさ。当たって砕ける。だ」

「砕けちゃダメだろ!?？」

「まあ、大丈夫だよね！」

そろそろいいだろうか。見た目からは水を使うことくらいしか分からない。その為、誰かが一度様子を見るしかない。というのは建前。誰かが傷つくリスクを負い、一番に突撃しなければならぬなら勿論その役目は――

「俺、だよな」

「え？」

園子が聞き返してくるのをしり目に、俺は全力で跳躍する。

なつくんが駆け出して行っちゃった……………。

「つて、あれ速すぎないか!？」

ミノさんが驚いている。鷲尾さんも声には出さないけど驚いているようだった。

「ちよつと乃木君!？」

彼が独断専行した理由はわかる。何年も一緒にいたから。きっと敵の情報の偵察、という建前で本当は私たちを出来るだけ傷つけたくないんだ。彼の不器用な優しさ、いいところでもあるけど、悪いところでもある。彼自身が傷つくリスクを頭に入れていない。彼が私に傷ついてほしくないように私も彼に傷ついてほしくない。

「なつくん私も〜」

「じゃあアタシ三番槍!」

「三人とも!待ちなさい!」

そういつて結局みんなで駆け出してしまふ。

さて、敵の前に着いたはいいいものの、どうせそう簡単には近づかせてくれやしない……。が俺にはそんなこと些細事だ。迷わず敵に突つ込む。どうせ水だ。当たらない

きやいい。

すると敵がたくさんの水球を放ってくる。全て躲しきり、胴体を斬る。

「浅い……！」

どうやらただ斬撃を入れただけでは致命傷を与えられない上に再生されてしまう。流石に一度3人のところへ撤退する。

「みんな、敵は主に水球を使ってくるけど、どうにも左右の丸いのが気になる。あくまで予想だが、水圧で攻撃してくるかもしれない。それに再生力もかなりのものだ」

一応さつき感じたことを報告する。

「なつくん？ 帰ったらお説教ね」

怖い。園子が少し怒っている。でも結局は誰かがやらないといけないわけだと反論しても絶対勝てない。

「はい…… わかりました園子様」

「長門は尻に敷かれてんだな」

「うっせ。兄たるもの妹には逆らえないんだ」

その時一瞬園子が少し悲しい表情をした気がした。気のせいかな。

「……っ!? みんな! 避けろっ!」

水鉄砲というよりウォータージェットが飛んできた。俺の声に三ノ輪と鷺尾さんは反応した。

(園子はっ!?)

「園子っ!」

「これ、盾になるんだっ!」

あの槍にそんなギミックがあったのか…… 続けて敵が水球をこつちに放つてくる。

鷲尾さんが矢をチャージしているが、多分水球に阻まれる。最悪俺がアレを使うか若しくは三ノ輪を敵のところまで運べれば倒せるが……

「台風のすごいみたい〜」

「アタシ、何とかしてくる！」

俺が言えたセリフじゃないが闇雲に突っ込んででも無駄だ。それに園子も持ちそうにない…… 俺はある方向へ視線を向ける。打開策を考える前にやることができたようだ。

みんなが敵の攻撃に攻めるに攻められず四苦八苦している。

「私がやるしかっ！」

そう言つて私は弓を構える。溜まるのが遅いつ！

「速くつ！」

最大まで貯めた私の矢は水球4つに簡単に止められてしまった。敵はお返しとばかりにこちらに水球を飛ばしてくる。

(躲しきれないっ)

思わず目をつぶる。が予想していた衝撃は来なかつた。目を開いてみると私がちよつぴり苦手な彼の後ろ姿がある。そんなことより

(まだいくつも水球が飛んで来ている！)

そんな私の不安を感じ取つたのか、乃木君がこちらを向いて

「心配するな。このくらいなら……」

そう言って刀を構える。構えがすごく様になっていてまるで小さいころから刀を扱っているような感じを覚えた。水球が彼に当たりそうになった時彼の背中がぶれた気がしたと思つたら刀に付いた水を払っている。

「大丈夫だったろ？怪我もなさそうだな」

いつものこちらの心の中まで覗いてくるような、観察する目ではなく、人を安心させるような、優しい目でこちらを見てくる。すると彼はすぐ飛び立ち乃木さんの方へ向かつていった……お礼を言えないまま――

今は戦闘中だ。頭を振つて意識を切り替える。

といっても私の矢ではダメージが足りない。三ノ輪さんは強力だけど近づけない。乃木君は近づけるけど決定打に欠ける。乃木さんは……どう扱っていいかわからない。

「一体どうしたら……」

その時また敵が水球を放ってきた。考え事をしていて反応が遅れてしまった。

「危ないっ！」

いつの間にか戻ってきていた三ノ輪さんが私を押し倒した。

「動いてないとあぶな……ぐっ！」

三ノ輪さんは水球の攻撃を顔に直接受けてしまった。

「三ノ輪さんっ！」

助けようとするが、水の弾力が強く、中々剥がれない。三ノ輪さんも必死にもがくがどうにもならない。

「ミノさんっ!」

「三ノ輪大丈夫か!」

二人が戻ってくる。するといきなり三ノ輪さんが目を開き

水を飲み始めた。

俺と園子は合流した後二人の元へ向かうとこんな状況になっていた。どうしてこうなった……

「ミノさん大丈夫?」

「全部飲んだ……」

「神の力を得た勇者にとつて造作もないのだ!……気持ち悪い……」

「水とはいえ敵のものを飲むとはなあ」

「ミノさんすごい!お味は?」

「最初はサイダーで、途中から烏龍茶に変化した……」

「ドリンクバーかよー!」

思わずツツコミを入れてしまった。子供のころみんなやるよなあ。色々混ぜるやつ。俺も子供だけだ。

「そんなことより、バーテックス!」

どうやらこの間にも結構進んでいたようだ。一つ打開策はある。おそらく園子も思いついているだろうが水圧の攻撃をどう凌ぐか悩んでいるのだろう。

「園子、少しいいか?」

確かにそれなら出来るけど……

「でもそれだとなっくんの負担が」

私の盾でやつと防げた水圧の攻撃を一人で請け負うなんていくら何でも彼の負担が大きすぎる。

「大丈夫。一回くらいだったら何とでもなるよ。」

その言葉を聞いてしまった上で反対するのは彼を信じていないことと同じだ。だから私も。

「わかったら、気を付けてね」

彼を信じているから。そして私たちのやり取りを遠巻きにそして不思議そうに見つめている二人の元へいく。

「ぴっかーんと閃いた〜！」

彼女たちにも作戦を話す。勿論なつくんの事で大丈夫なのか？と言われたけれど、彼

が大丈夫だつて！と言うと引き下がった。

4人で敵の前までいく。あの水圧の攻撃をしてもらわなければならない。すると隣から濃密な殺気が漏れてきた。

(なつくくん?)

「バーテックスも殺気に気づくかなと思っただけだ。どうやらその通りみたいだな」

これは新しい発見だ。などとつぶやく彼の方からバーテックスの方に目を向けると確かにバーテックスはなつくくんを危険と判断したらしく、こちらを向きながら攻撃の予備動作をしていた。

「じゃあ手はず通り、頼むよ園子」

彼は刀を鞘に納め、目を瞑った。

「ミノさん、すみすけ、私たちも位置に着くよ」

「え？なんか長門が刀を鞘に納めちやってるけど大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。あれがなつくんの本気だから」

そう言つて二人を連れてなつくんから離れる。

そしてチャージを終わらせた敵がなつくんに向かつてウォータージェットを放つ。

なつくんは当たると直前に目を見開き。

「はあっ！」

すみすけが心配そうになつくんのほうを見つめているが。大丈夫。すみすけが見つめる先には無傷のなつくんが立っている。

「うっわー！すっごいなあれ！かっこいい！」

「え？いったい彼はどうやって……」

「簡単だよすみすけ。水を斬ったんだよ」

「は？」

そう、彼は何も特別なことはしていない。ただ飛んでくる攻撃を刀で斬っただけのことだ。

「でもそんなことって……可能なの？」

「可能か不可能かで聞かれたら、可能だよ。流石になつくんでも生身の身体能力じゃ無理だけどね」

彼の勇者システムは私たち三人のそれと比べて明らかに弱い。でも彼はそれを補えるだけ、元から強い。それを弱めとはいえ底上げしてくれるシステムが加わったら…… 戦闘面では私たちの中ではミノさんと同じくらいじゃないだろうか。もっとも、彼は対人戦のほうが優れているけれど。

2 発目がこつちに飛んでくるけど何とか3人で押し返すと、私とミノさんは高く跳躍して敵に突撃する。飛んでくる水球はすみすけが対処してくれている。私は槍の持ち手に掴まっているミノさんを敵に投げた。

「うおおおおお!!!」

ミノさんが連撃を浴びせる。そしてその勢いでミノさんが吹き飛んでいく。

「ミノさん!!!」

そのまま地面に衝突しそうになる。

敵の攻撃を防ぎ切った俺はあいつらの加勢をしに行こうとしたところで三ノ輪がこちらに吹っ飛んできてることに気づいた。

「たくつ。無茶をする」

三ノ輪を抱えて受け止める。するとパーテックスの周りで花卉が舞う。

「これって……」

「鎮火の儀……？」

園子がこつちに駆け寄ってきた。

「ミノさん大丈夫？」

「ああ。長門が受け止めてくれたから……なあ長門、そろそろ降ろしてくれないか？少し恥ずかしい……」

「お、おう。すまん」

三ノ輪が頬をわずかに赤く染めてそう言ってくる。慌ててすぐに三ノ輪を降ろす。よかつた樹海化していて。こんなところクラスの連中が見たら、俺吊るされるまである。

「だけど、三ノ輪のおかげで撃退出来た。流石だな」

「やったー！」

三ノ輪と園子がはしゃいでる中、俺たちは元の世界に戻された。

「そつかく。学校に戻るわけじゃないんだ」

「まあ多少なりとも傷があるからいきなり教室に戻っても驚かれるだろうし」

兎に角、みんな無事でよかった。もう自分の目の前で人が死ぬのを見るのは嫌だからな……。そんなことになるくらいなら俺が――

「なつくんくすみすけく？」

「おわつ。園子か。どうした？」

「さつきから何回も呼んでたよ。どうしたの？」

「……良かったなと思って」

「そうだね」

園子の合図でみんな解散する。勿論俺と園子は同じ家なので一緒に帰る。

園子も頑張っていたし帰ったらデザートでも作ってやるか。俺は大丈夫だが、3人は初戦闘でしかもただの女の子なのだ。勇者システムで能力が底上げされ、多少訓練した

とはいっても精神面はそうもいかない。鷲尾さんは特に自分を追い詰めてそうだから。明日イネスにでも連れてってやるか。

すると不意に左手に柔らかくて温かい感触がした。隣を見ると園子が俺の手を握っている。

「もう無理はしないでね？」

それは、普段の彼女の雰囲気とは遠く瞳が悲しそうに揺れている。だから俺もぼんつと園子の頭に右手を置き撫でながら真剣に言葉を紡ぐ。

「ああ。分かってる。無理はしないよ」

そう言つて手を握り返すと園子は満足そうに微笑んでいる。

確かに無理はしない。だが園子に、園子たちに何かあれば俺は……

「それになつくん。忘れてないよね？」

「え?..... あっ」

家に着くと俺は2時間正座させられ園子に怒られた。勿論デザートは作った。

足が痛い.....

しゆくしょうかい

神樹様選ばれたと聞いたときは理由がわからなかった。

神に見初められるのは無垢な少女のはずなのに。

でも彼女も選ばれてしまったから理由なんて要らなかった。

特にそれが文字通り■を■げて戦うものだとかわかったときには彼女を……
彼女たちを守らなきゃいけないと強く思った……

勇者御記298年 乃木長門記

最初のお役目を果たした次の日学校に着くと朝の学活前に4人で立たされた。安芸

先生がお役目についてクラスの人たちに言うらしい。ああこれ機密事項じゃないのか？でもまあいきなり授業中にいなくなったりしてたら不信に思われるから軽くぼらした方がいいか。それより休み時間に問い詰められそうだから逃げるか……そもそも問い詰められるほどのつながりがなかったんだ。目から汗が……

「昨日お話しした通り4人には神樹様の大切なお役目があります。だから教室から突然消えても、慌てたりせず心の中で応援してあげてください」

「休み時間になると三ノ輪が質問をうまく躲かしていた。流石三ノ輪。俺とはコミュニケーション能力が雲泥の差だ。そんなことより今はこのラノベを読破するのが先である。昨日学校に置き忘れちゃったからな。すると不意に鷺尾さんが立ち上がる。」

「こほん。ねえ三ノ輪さん、乃木さん、乃木君。よ、よければその……これから祝勝会でもどうかしら……？」

鷺尾さんがそんなことを言い出すとは思わなかったな。イネスにどう連れてくか悩んでたところだし丁度いい。勿論園子と三ノ輪は快諾した。

「いいな、それ。付き合うよ。場所は……イネスが良いと思うんだけどみんなどうだ？」

みんなから賛成を貰ったのでイネスのフードコートで祝勝会をすることになった……のだが

「今日という日を無事に迎えられたことを大変うれしく思います。本日はお日柄も良
く……」

「堅苦しいぞー。かんぱーいー」

鷺尾さんは良くも悪くも凝り性というか……かなりの真面目さんだな。

「ありがとねすみすけ」

「え？」

「私もね、すみすけを誘うぞ誘うぞって思ってたんだけど、中々言い出せなくて。だからすごく嬉しいんだよ」

「鷺尾さんから誘ってくるなんて初めてじゃない？」

「実はそうなんよ〜！」

「まあ今まで合同練習とかもなかったしな」

「それなのにアタシら初陣よくやったんじゃない？」

「私も興奮しちゃって〜。ガンガン語りたかったんだ〜」

乃木さん家の園子さんは昨日散々俺に語ってたんだけどなあ。おかげで少し寝不足気味だ。

「実は……私も。その……話がしたくて3人を誘ったの。3人の事あまり信用してなかつと思う。3人が嫌いとかじゃなくて、私が人を頼るのが苦手で……」

まあ俺も似たようなものだしな。ただ俺の場合人を頼るのが。ではなく人を信じるのが。本当に独りである人間が独りで何でもできるのであればほかの人に頼る必要はない。けどこの3人はお互いの弱点を上手くカバーしあってこそ力を発揮すると思う。あくまで俺の感だが。

「でも、それじゃダメなんだよね。私ひとりじゃ、多分何もできなかった。3人がいたから……だから、その……これから私と仲良くしてくれますか!」

俺と三ノ輪と園子は互いに微笑みあい

「もうすでに仲良しだろ?」

「まあそういうことだ」

「嬉しい!私もすみすけと仲良くしたかったんだ。ほら、私も友達作るの苦手だったから。すみすけも同じ思いだったんだ。嬉しいなすみすけ」

「乃木さん……そのいつの間にか言ってるすみすけっていうのはなに?」

「あ、いつの間にかあだ名で呼んでた」

流石園子だな。でも園子に友達ができてよかった……理解されにくいタイプだからな。

「嬉しいけど……それ、あまり好きじゃないかな」

「じゃあわっしーなは?アイドルっぽくない?」

「もつと嫌よ。乃木さんもそのこりんとか嫌でしょ?」

「わ〜!素敵〜!」

「忘れて……」

「じゃあわっし〜!どう?」

園子の目が輝いているのを見てか鷺尾さんは諦めたようだ。

「まあ、それでいいかな」

「よろしくね、わっし〜!」

「じゃあアタシのことは銀って呼んでよ!三ノ輪さんは余所余所しいなく」

「そうだね〜。微笑ましそうに眺めてるなつくくんもね〜」

「俺に飛び火したっ!」

気配は完全に消したと思ってたのに……園子には効かなかったか。まあ本人からのご所望なら仕方がない。

「わかったよ、銀。これでいいか?」

俺の呼び方に納得したのか三ノw…… 銀は満足げに頷いている。そして鷲尾さんが困惑しているのを見て

「あはは。まーいつか。よーし、今日という日を祝って、みんなで絶品ジェラートを食べよう！」

というわけでみんな各々の味のジェラートを買って食べる。ちなみに俺はマックスコーヒー味だ。どうやら旧世紀にはペットボトルや缶コーヒーとしても売り出していたらしいが、神世紀にはもうこのジェラート屋にしかその名前は残っていない……自分で作ったりしてみてもたんだが、やっぱり何かが足りない。その点このジェラートは最高だ。本を買いに来たときに見つけて以来ずっと通っている。

「はふう…… しあわせ〜メロン味大正解〜」

ふと鷺尾さんの方を向くとなにやら難しい顔をしてジェラートにガンをつけていた。ジェラートに何か因縁でもあるのだろうか？

「鷺尾さんそんなにジェラートを睨みつけてどうしたんだ？」

「いえ……宇治金時味のジェラートがおいしくて……」

何やら小声で「美味だわ！ほろ苦抹茶とあんこの甘さが織りなす調和が絶妙。でも浮気した気分……」などと言っている。もしかしたらジェラートを食べるのは初めてなのかもしれない。

「そんなに美味しいなら、あ〜ん」

「えつと……こういうの初めてで」

「ん〜美味しい〜。初めての共同作業だね〜」

鷺尾さんはその言葉に赤面している。なんか君たち初々しいですね。まあこの分ならこの祝勝会も開いた意味があったと言えよう。

「やっぱり最強はこのしょうゆ豆ジェラートだな！」

なにそれ、なんかちよつと美味しそうだな。今度来たら食べてみよう。鷲尾さんと園子が味見をさせてもらっていたが、難しい味。だそうだ。

「なつくんのは何味〜？」

「マックスコーヒー味だ！」

「なつくんがいつになく元気だ〜」

「マックスコーヒー味は至高だからな。」

珈琲なのに明らかに練乳の比率のほうが大きい暴力的な甘みが疲れた体に効く。帰ったら第6回マックスコーヒー自作実験をするか。以前は確か砂糖の量が多かった気がするからそこを踏まえて再挑戦だな。くだらないことを考えていると園子が俺の方に口を開けて待っていた。

「あ〜ん」

「仕方ないな。はいよ」

「ん〜。ちよつと甘みが強いけどおいしいね〜」

「どうやら園子には甘かったようだ。その甘すぎなくらいがいいアクセントになっていいと思うんだが……」と鷺尾さんがなんか顔真つ赤にしてこちらを見ている。どうしたのだろうか。

「か、か、か、間接キス!? しかも異性で……」

「鷺尾さん……俺たち兄妹だぞ? 別にこのくらい普通だろ?」

俺が呆れたように返事をする。鷺尾さんは「そうよね……二人は兄妹よね……」とつぶやいてなにやら難しい顔をしていた。そして遠慮がちに言う。

「ごめんなさい。二人があまり似ていないから兄妹だということを忘れていて……」
「アタシも驚いたな。二人とも全然似てないから最初はわからなかったよ」

園子が心配そうにこちらを見つめてくる。この話はあまりしたくないのを知っているが故の表情なのだろう。でもこの二人なら俺は話してもいいと思ってる……がここは祝勝会の場だ。あまり空気を悪くしたくない。だから俺は表面的なことだけ言う

ことにした。

「ああ。同じ学年だしな。それに俺は乃木家に養子として入ったんだよ。だから乃木の血は入ってないんだ」

「そうだったのね…… そういえば乃木君と乃木さんはどちらの方が早生まれなの？」

「会話の内容的に長門のほうがお兄ちゃんなんだろうけど誕生日いつなんだ？」

鷺尾さんと銀が何かを察したのか別の話題を聞いてくる。

「私は8月30日で、なつくんは8月28日なんよ〜」

「まあだから実際年の差はないようなもんかな」

二人とも、そんな近かったの!?!と驚いている。この誕生日の近さなので普段は兄妹というより幼馴染、もしくは双子感覚だ。

そろそろ解散かな。3人に声をかけて解散しようと腰を上げようとしたとき鷺尾さんが俺に待ったをかけた。

「乃木君……あの時言いそびれてしまったから……助けてくれてありがとう」

「お礼を言われるようなことじゃないんだけどな。仲間を助けるのは当たり前だ」

「それでも、言いたかったから……」

「そうか……」

こう面と向かって言われるとちよつとアレだ。こんな実直に礼を言われることはあまりないので気恥ずかしくなつて目を逸らす。唐突な俺の反応に鷺尾さんが戸惑っている。

「なつくくんが珍しく照れてる〜！」

「別に照れてないっての……」

「ふふっ」

「鷺尾さんも笑わないでくれ……」

「ごめんなさい。つい」

こうして俺たちの初めてのお役目は何とか無事に終わった。

これは、4人の勇者の物語。
神に選ばれた少年少女のおとぎ話。

いつの時代も神に見初められるのは無垢な少女たちである。

しかし、法則に例外がつきものなように。

彼もまた例外の一部である。

そして例外がいるとしても

その結末はきつと——

がつしゆく

乃木長門とは何年も過ごしているが、彼はとても個性的な人だ。

同級生とは思えない落ち着きようで、好奇心が強く、それでいて優しかった。

でも私は彼の本質を甘く見ていた。

もしも私が止められていれば

彼の■■■は失わずに済んだのに…

勇者御記 神世紀298年 乃木園子記

俺たちが1体目のバーテックス——【水瓶座】アクエリアス・バーテックス（大赦）によれば攻めてくるバーテックスは12星座の名を冠しているらしい）を追い返してから一か月。2体目のバーテックスがやってきた。

「これじゃあ…身動きが取れないぞ…竜巻を起こしてるなら上から目を狙えば行け

「そうだが」

「くそっ！身動きとれねえよ……」

「でもなつくんの言う通り……上から攻撃するしかっ……」

これは非常に困った。2体目のバーテックス——天秤座は自分の体を回して竜巻を起こして俺達に攻撃させないようにしている。どうしたものか……すると鷺尾さんが園子を支えていた手を放し、上へ飛び矢を放つ。

「そんなっ！」

鷺尾さんの矢は風に負けて推進力を失ってしまった。普通の矢じゃダメだ。かといってチャージする時間もない。とすると現状を打破できるのは二人だけ。

「……っ!?園子！盾！」

「あぶないっ！」

俺の声にぎりぎり反応した園子が盾を展開しかろうじて防ぐ。がもう限界そうだ。

俺が突っ込むか銀が突っ込むか…… 勿論答えは出ている。それにもう浸食が進んでいる。俺は天秤座の真上へ向かって全力で跳躍した。

「長門！」

「銀！俺が動きを止める！その後は頼んだ」

そう言つて俺は風の影響を受けない真上まで来る。

「はっ！」

降下しつつ全力で斬りつける。竜巻の勢いが弱まるが、俺は素早く跳躍してひたすら斬りつける。すると風の影響がなくなったのか銀も加勢する。

「うおおおおお!!!」

「ふっ！」

俺は刀を、銀は斧を振りまわす——

「ごり押しにもほどがあるでしょ！」

どうやら安芸先生にばつちりと見られていたらしい。俺たちの戦鬪がお気に召さなかつたらしい。流石に現実世界への影響を鑑みたからと言って怪我覚悟で突っ込むのはまづかつたか……

因みにきちんと天秤座は追いついた。

「これじゃ、あなたたちの命がいくつあっても足りないわ……」

憂う表情で安芸先生はそう呟く。

本当にいい人だ。大人なら現実世界への被害を抑えることを最優先に考えそうなものだが安芸先生は俺たちを心配してくれている。勇者としてだけではなく生徒としても見てくれている証拠だろう。

「お役目が成功して、現実への被害が軽微なもので済んだことはよくやってくれたけど……」

「それは、三ノ輪さんと乃木君と乃木さんのおかげです！」

鷲尾さんはそうフォローしてくれる。けど流石の俺もあれは反省している。

安芸先生も同じことを考えているだろうが、まだ俺たちは連携が甘い。誰が一番上に立ち指示出しするか、などの役割分担もしていない。差しあたってまず役割分担から入った方がいいだろう。

俺の考えていることを察したのか安芸先生はこちらに視線を一瞬向け、また4人全体を見渡し溜息をつく。

「あなたたちの弱点は連携の演習不足ね……まず、4人の中で指揮を執る隊長を決めましょう」

「「ー」」

「そうね……乃木く「先生」……なにかしら？」

俺を推薦しようとしていたので止める。俺は誰かの上に立つような人間じゃないし、なにより無茶をしすぎる。通常時はまだしも、いざという時のためにはリーダーは俺じゃなくて――

「俺には隊長は務まりません。少々無茶が過ぎますから。俺は乃木園子さんを推します」

「自覚しているのなら直してほしいのだけれど……でもそうね。乃木君がやらないのなら乃木さん、頼めるかしら？」

安芸先生は呆れた声で俺に言った後、園子にそう聞いた。

「え？わ、私、ですか……？」

園子は自分が呼ばれるとは思っていなかったらしく俺たちを見渡す。確かに普段の園子のはほんとしていて、いざという時のひらめきや決断力には目を見張るものがあるし……なにより天才タイプだ。前にチエスをやったときにそういう流れみないなものが読めると言っていたし、使用人相手に何十連勝かした俺だが初心者園子に

負けそうになった。

園子が銀の方を向くと銀は大してリーダーになりたいわけでもないらしく「アタシじゃないならだれでも」と言った。

「俺はさつき言った通りだ」

「私も、乃木さんが隊長で賛成よ」

鷺尾さんは一瞬だけ逡巡した後そう答える。たまたま席が隣だから分かったがあれは少し不満だが無理やり納得したつてところか？まあ確かに俺も普段の園子だけを見ていたら推薦はしない。

鷺尾さんにはどこか自分がみんなをまとめているという自負がある気がする。だがこればかりはいざという時の園子を見ないと納得できるものでもない。

「決定ね。神託によると次の襲来まで割と期間が開くみたいだから…… 連携を深めるために合宿を行おうと思います」

「『合宿？』」

そう来たか……合宿をするのは構わないのだが、一念のため確認しておかないと。

「先生。勿論部屋は俺の分1部屋とってありますよね？」

「ええ。けれど食事の時は同じ部屋に居てもらおうわ」

「はい。それなら構いません」

こうして合宿することになり荷物をまとめているのだが。

「そ、園子さん……？今カバンに詰めた白は一体……」

「向こうでもおうどん作れるように持っていくんよ」

もう園子のフリーダムさには慣れたので何も言わないが、しかしこれだけは言いた
い。

「なんで園子の部屋に呼ばれたの？お兄ちゃんも準備あるんだが」

そう。俺がとりあえず衣類を入れ終わり向こうで読むラノベや鍛錬に使う木刀を持っていこうとした矢先に園子からお呼び出しがかかったのだ。

「今日一緒に寝よ？」

「もう子供じゃあるまいし……」

「だめ……？？」

そうやって悲しげに瞳を揺らして上目遣いで頼まれたら俺にはもう為すすべがない。仕方なしに承諾するときさっきまでの悲しげな表情が嘘のようにハイテンションになり準備を再開した。

仕方ないか。俺も一度溜息をついて準備をとつとと終わらせる。

……朝起きたときに使用人が微笑ましそうにこちらを見ていた。とだけ言っておこう。

次の日の朝寝ぼけ眼を擦っている園子を連れてバスに乗り込んでほかの二人を待た……のだが。

「すびー……すびー」

「……遅いっ！」

鷺尾さんはきちんと余裕を持って到着したのだが銀がいつも通り遅刻している。本人からちらつと家庭事情を聞いた身としては彼女を責められない……

園子はいつも通り寝ている。俺によりかかりながら。

「悪い悪い。遅くなっちゃった」

「遅いっ！昨日あれだけ張り切っていたのに十分遅刻よ！どういふことかしら!?!」

息を切らしながら車内に入ってきた銀を迎えたのはふくれっ面の鷺尾さん。

「色々あつて…… いや、悪いのはアタシだけど…… 兎に角ごめんよく須美」
「この際だから言わせてもらうけど、三ノ輪さんは普段からの生活がだらしないと思うわ！勇者として選ばれた自覚を……」

そろそろ銀のフォローに入ろうとした時。

「ほえ？…… あれ？お母さんここどこ？？」

「俺はお前のお兄ちゃんなんだが…… ここはバスの車内だよ。合宿に行くためにさつき一緒にバスまで歩いただろ？」

「えへへ…… そうだった」

どうやら銀にとってはこのやり取りが助け船になったようだ。全員揃ったバスは合宿地に向けて動き出した。

「お役目が本格的に始まったことにより大赦は全面的にあなた達勇者をバックアップします。家族や学校の事は気にせず頑張ってくださいね」

「「はい！」」

讚州サンビーチにやってきた俺たちは早速訓練をするのだが……

「準備はいい？この訓練のルールはシンプル。あのバスに三ノ輪さんか乃木君を無事到着させること。お互いの役割を忘れないで！」

うん。それはいいんだけどね。いいんだけどさ……

「先生、何故俺だけ武器使用禁止で躲すだけなんですか？……」

「あなたの経歴は把握しているもの。武器を持たせたら1人でもクリア出来てしまうでしょうから」

なんで!?!それは過大評価だ。流石にあれだけの障害物は少し骨が折れる。このやり

取りを聞いていた鷲尾さんが顔を顰めた。まあ今から4人でやろうとしてることを俺1人でも出来ると先生に言われてしまえばそうなるのも頷ける。

「過大評価しすぎです。俺1人では骨が折れます」

「出来ない。とは言わないのね。でもそういうことだから」

まあ先生の指示なので大人しく引き下がる。だが先生も中々考えたものだ。俺が障害物を打ち落とせないとなると必然的に3人に頼るしかなくなる。……球自体には威力は大してないので一応1人でも全力になればもしかしたら行けるかもしれないが訓練にならない。大体この訓練にはそういう1人で何とかしようとするのを直す目的もある。

となると実質俺がこなすべきなのは視界が狭まっている園子のフォローと銀の死角を補う。といった感じか。

「いくよ〜」

「うまく守ってくれよ?」

「出来るだけな」

「私はここから動いちやダメなんですかー？」

「ダメよー！」

鷲尾さんは遠距離武器なので俺たちからは少し離れたところで援護するそうだ。俺は園子の視界確保のためもあるので銀と園子の横に並ぶ。

「それじゃあ、スタート！」

「行くよー！」

掛け声とともに園子が槍を展開して突撃する。銀は「ここからジャンプしちやダメなのかー？」と言っている。それ、訓練の意味ないだろとツツコミを入れかけたが気配を感じ真正面から飛んできたボールをかがんで躲す。障害物であるボールはかなりのスピードで射出されているが問題なく見える。

鷲尾さんが上から銀に当たりそうな球は打ち落としてくれている。

「銀！上来るぞー！」

「っ！……あ痛！」

「アウト！」

「悪い銀。俺がもう少し早く反応しておけばよかった」

「ごめんなさい！三ノ輪さん」

「どんまいだよ！わっしー」

「あんまり気負うなよー」

「呼び方も堅いんだよー。銀でいいぞ。銀で」

「私の事はそのうちでー！はい、呼んでみてー」

鷲尾さんは真面目だから気負ってしまっているのだろう。訓練を通して何か変わる
といいんだけど。

「はい！もう一回！ゴールできるまでやるわよ！」

え？

結局今日はゴールできずに終わってしまった。事前に言われていた通り、俺たち4人は基本固まって行動しなければいけないらしい。1+1+1+1を4ではなく10にする。だそうだ。

今は食事中なので俺は3人の部屋へ移動して一緒に食べている。

「わっしー荷物あれだけ〜？ 少なくない〜？」

鷺尾さんの荷物は簡素に必要なものだけ持ってきているといった感じだ。他2人の荷物はツツコミどころあるんだが……

「ミノさんお土産買うの早すぎ〜」

「そう言う園子の荷物は何だ？ ……」

「どこからツツコんでいいか分からないわ ……」

「臼でおうどん作るんよ〜」

「長門はどんな感じなんだ？」

そんな面白いものは持ってきていない。衣類と本と糖分補給用のお菓子と木刀くら

いだ。そう伝えると「なんで木刀なんて持ってきてるんだ……」と呆れられてしまった。

昨日は初日だったのでなかったが、どうやら合宿中にも授業はするそうだ。正直面倒くさい。なにせ4人で横に並んで受けてるから寝るに寝られない。というかこの状況下で寝られるのは園子くらいだ。案の定彼女はすやすや眠っている。これで授業は理解できてのだから流石だ。俺は使用人に先の勉強を教えてくださいと頼みいつも見てもらっている。だから今は高校レベルくらいにはなっていると思う。因みに園子は見てもらっていない。

つまり、何が言いたいかというと暇だ。今は社会をやっているのだが、バーテックスがウイルスから生まれただとか、そのあたりの話だ。

……
ただのウイルスの突然変異で生まれた生物に頂点なんて意味の名前をつけるだろうか？昔から考えていたが、お役目選ばれたことで知り得た情報も併せて、ある1つの仮説を立てた。正直この予想は突拍子もないし、誰かに話したら笑いものにされ

るレベルだ。それに当たっていてほしくはない仮説だ。だけど、もし方が一この仮説が当たっているとしたらこの世界はもう――

「ところが何が起こったのか…… 乃木さんは答えられる？」

「すぴー…… ふえ、はいくバーテックスが私たちの住む四国に攻めてきたんです」

「…… 正解ね」

そのやり取りで俺の意識は現実一気に引き戻される。それにしても園子は睡眠学習でも会得しているんだろうか。

勉強を終えた俺たちは再び昨日の訓練をする。

「おっしやー！これで……」

「銀！後ろだ！」

「へっ？……ぐはっ！」

今日もダメだった…… 惜しいところまではいってるんだが、如何せん銀が飛んだあとは無防備に近くなるので難しい。

朝、いつも通り5時に起きると外はまだ薄暗い。三ノ輪さんと乃木さんはぐつぐつと眠っている。

まだ起床時間には余裕があるので私は目を覚ますついでに近くに散歩しにくりだした。私たちがこの合宿中訓練に使っている讃州ビーチの方からする音に誘われ向かう。

「ほっ！ほっ！てやあ！……ふう、まだまだだな」

私は目を奪われた。乃木君が訓練に使っていた射出機を並べて飛んできた球に飛びついたと思ったら、斬りつつ球を蹴りその勢いで次の球へ。まるで空中を舞うかのよう。球から球へ飛び移る姿はまるで妖精だ。武道を嗜んでいない私でもその洗練された動きはよくわかるほど極まっていた。先生が彼なら1人でもクリアできてしまうと聞いたのは嘘ではないと思った。

しかし途中で勢いが足りなくなり落ちてくる。地面に着地した彼はあたりを見回す。

「誰だっ?!……………なんだ鷲尾さんか。話しかけてくれればよかったのに」

見惚れていた……………などとは言えず、咄嗟に嘘ではないが本当でもないことを言うことにした。

「いえ……………邪魔するのも悪いと思つて。これは一体……………?」

「ああこれは安芸先生にお願いして朝のこの時間だけ備品を借りたんだよ。この球はかなりの速度で飛んでくからいい練習になるんだ」

「乃木君は何か武術を嗜んでいるの?」

「……………居合を基本にして剣術はある程度はね」

「だからあれほど強いのかね」

しかし私がそう言うのと彼はどこか悲しげな笑顔を浮かべて「俺は強くなんかないよ」と否定する。どうやらこの手の話はしたくないようなので一先ず鍛錬を見学させてもらう許可を取り話を逸らした。

すると今度は射出機を横一列に並べた。いったい何をするのだろう。少し彼のする

ことにワクワクしている自分がいることに気づいた。球が少し時間差で彼の方へ飛んでいく。

「ふっー」

彼は自分のところに来た幾つもの球を捌いていく。致命傷となる部分に来ている球に専念しているようで、時々肩や顔を球が掠めていく。それを繰り返すと、もうそろそろ起床時間になる。

「ふう。鷺尾さん、もう起床時間が近いしそろそろ行こうか」

今日の訓練で使うからだろうか備品をそのままに勇者システムを解除してこちらに歩いてくる。

いつも彼の行動はよくわからない。今だって強く、それに頭の回転も速い。なのにリーダーは下りたうえ、何故か乃木さんを推薦した。乃木さんはだらしなからあまりリーダーに向いていないと思うけれど……身内だから？

いずれにしても私がまとめないと！そう決意した私に隣を歩いてきた乃木君が呟く。

「銀と園子の事は信じてほしい。もっと頼って欲しいな。鷺尾さんの周りにはちゃんと仲間がいるんだから……。まだやり直しのきくうちにね」

助けてくれたあの時のような優しい目。だけれど何かを後悔している、そんな目。真剣な彼の表情も相まって私は頷いてしまった。

しんじつ

今日の朝は瞑想をさせられている。園子はもちろん寝ているが、銀が落ち着かない様子で震えている。いや瞑想くらい頑張れよ……雑念しか感じないぞ。鷲尾さんを見ると姿勢よく瞑想していた。むしろきちんと瞑想しているのは鷲尾さんくらいだ。それにしてもさつき言いたかったことは伝わっただろうか。お節介が過ぎたかもしれない。

しかしバーテックスに知能があるとしたらこれから先は一筋縄ではいかないと俺の感が警鐘を鳴らしている。今までは偶々相性が良かっただけかもしれない。俺にも奥の手はあるにはあるがそこまで期待出来るほどのものじゃない。だからこそ連携を深めるのは重要だ。だから今日の朝、拙かったが俺の言いたいことは言った。まあ今はそれよりも訓練をどうクリアするかだ。もう少しなんだけどな……

「サンキューー！うおりやああああ
!!!!」

「「はああああ……」」

私たちは今合宿最終日の入浴タイムだ。本当はなつくんも連れてこようとしたけどわっしーに止められてしまった。

「毎日毎日、バランスのとれた食事。激しい鍛錬。そしてしっかりした睡眠。勇者というか……運動部の合宿だよなこれ。なんとというかバーンっ！と超必殺技を授かるイベントはないのかねえ須美？」

「今回は連携の特訓だから仕方ないわねー」

「なんか私、更に筋肉ついてきたかも」

流石になつくんほどは付いてないけど、ずっと槍で球をはじき返していたからか少しは筋肉がついてきた気がする。

「強くなるのは良いけど、これから成長する女の子がこなすには色んな意味で厳しいメニューだよなあ……」

「ミノさん、竜巻に巻き込まれかけてたけど傷は大丈夫？」

「長門が助けてくれたから平気だったよ。園子は？」

なつくんが助けに入っていたのは知っていたけど、念のために聞いたらやっぱり大丈夫だった。彼にも聞いたが大丈夫と言われた、が私は切り傷が出来てるのに気づいたので絆創膏を張っておいた。彼は素直じゃないからこんな傷に入らない。なんて言っていたけれど。

「私はどっちかって言うところちが染みる」

あの槍を持っていると手に肉刺が出来てしまう。だからこうしてお風呂に入ると染みてしまうのだ。私は肉刺を指さしながらそう言う。

「ああ。あれ握っているとそうなるよなあ。ところで、鷺尾さん家の須美さんも体を見せなさい」

「な、なんで？」

「クラス一の大きいお胸を拜んでおこうかなあと。まるで果物屋だ！親父、その桃をくれえ！」

わっしーとミノさんが取っ組み合いを始めているけど、それよりなつくんとサンチョも入れてあげたかったなく。なつくんは後で入るんだろうけど。すると安芸先生も入ってきた。

「三ノ輪さん、鷺尾さん。温泉で騒ぎすぎ」

「大人の体つてすごいんだな。服着てると分かんないな」

「そうね。例えるなら戦艦長門……」

「長門？あいつがどうかしたのか？」

なつくんに聞いたことがある。確か彼の名前の由来になった旧世紀の戦艦だ。まあ彼は「着工日に生まれたからって安直すぎるだろ……」と言っていた。でもその時満更でもない顔をしていたので気に入っているんだと思う。するとわっしーが得意げに語ってくる。

「確かに乃木君も同じ名前だけど違うわ！旧世紀の我が国が誇る戦艦よ！詳しく話してあげる!!」

「あ、ああ。う、うん」

お風呂から出た私たちは布団を敷いて寝る準備をしている。

「お前ら、合宿の最終日に簡単に寝られると思ってる？」

私はサンチョの枕を持ってきているから大丈夫だ。本当なら抱き心地の良いなっくんも欲しかったけど、別々の部屋なので仕方なく諦めた。

「自分の枕を持ってきているから簡単に寝られるよ」

「それ、名前タコスだっけ？」

「サンチョだよ」

「で、園子さん。その恰好は?.....」

「鳥さん! 私焼き鳥好きなんよ」

この鶏の寝間着は私のお気に入りで。なつくんには「それじゃ食われる方になつてぞ.....」って呆れられてしまった。

「兎に角だめよ! 夜更かしなんて」

「マイペースだなあ須美」

「言うことを聞かない子は..... 夜中迎えに来るよ?」

「迎えにくる.....」

わっしーは両手を前に突き出して言う。私は血だらけのゾンビが襲ってくる映像が頭に浮かんで顔を青ざめる。

そんな空気を変えるようにミノさんが別の話題を出す。

「そんなホラーより、好きな人の言い合いっこしようよ」

「好きな人って..... 三ノ輪さんは?」

「敢えて言うなら弟とか！」

言い出しつぺのミノさんはわっしーに聞かれ家族を出した。そういうのはずるい。そう言えば

「なつくんは？」

「長門かあ……でもあいつ女の子みたいだしどちらかというと親友かな？」

なつくんが聞いたら凹むだろうな。女顔の事すごく気にしているみたいだから。

「須美は長門の事どう思ってるんだ？」

「へ？私？……というかこれって好きな人の話だったんじゃ……」

確かなになつくんはお役目が始まってからわっしーの事をよく気にかけてるみたいだけど……前に本人に聞いたら昔の自分と被るところがあるって言っていた。

それでも、少し妬いてしまう。4人である時間も好きだけど、なつくんと2人で過ごす時間はとても落ち着く。お役目が始まってからは彼と2人きりである時間は少なく

なってしまったのでちよつぱり寂しい。

「乃木君には戦闘中助けてもらつたりしたけれど……友達かしら」

「須美の口から友達という言葉がパツと出てくるとは……銀さん嬉しいぞ！」

ミノさんがわっしーに抱き着く。わっしーは嫌そうに手をどけながらも顔は満更でもなさそうだ。

「三ノ輪さん！もう離れなさい！……ところで乃木さんは好きな人とかいるのかしらっ！」

「ふっふっふ……私はいるよ〜！」

「誰!? クラスの人？」

「うん！ わっしーとミノさんとなつくん〜！」

「だと思つたよ……というか長門は兄妹じやんか」

どうやら2人とも勘違いしているようだ。私はさっきの発言を訂正する。

「なつくんは兄妹としても好きだけど、違う意味だよ」

「ええ!?!…… それって乃木さんは乃木くんの事異性として好きだということ!?」

「でも2人は兄妹なんじゃ…… あ、そう言えばこの間長門は養子だって言ってたな」

2人とも驚いているが、そんなに驚くことだろうか? 幼馴染として何年も過ごしていれば自然とそういう感情は芽生えてくると小説にも書いてあった。

「なつくんとは元々幼馴染として過ごしてたからね」

「で、いつから好きになったのさ?」

「ん、いつからっていうのは難しいかも。気づいたら好きになってたから」

「そうだったのね…… ん? 元々幼馴染だったという事は…… 乃木君は私みたいにお役目のために養子入りしたわけではなかったのね」

なつくんには2人になら話してもいいと言われたけれど、深い話は私もさすがに知らないから少し話すことにした。

「そうなんよわっしー。それになつくんはそれなりの家柄の子だったんよ。『神崎』つ

て言つて分かるかな〜?」

「アタシはさつぱりだよ。須美は?」

「噂程度に聞いた程度だけれど…… 確かあの『上里』の親戚にあたる家柄で発言権もかなり高いほうなんじゃないかしら?」

わっしーの言っていることは正しい。私が急に真剣な表情をすると2人とも身構える。

「それで合つてるよ。兎に角まずは神崎家の今を話さないとね〜」

「今つて…… 長門はいるし特に何も無いんじゃないか?」

「三ノ輪さん。何もなかったら乃木君は養子にならないでしょう?」

「結論から言うかね…… 神崎家はもうなつくん1人だけしかいないんだよ〜」

神崎家は彼以外みんな死んでしまった。格式高い家系が丸々1つ消えるのは本来なら大事件だ。

「彼のお母さんやお父さんも事故や病気で亡くなられてしまったということ?」

「まあそうなんだよ。それで特に親交のあった私の家になつくん本人と私のお母さんの希望で養子になったんよ」

2人とも納得したのかももう何も聞いてこない。

本当は少し違うんだけどね……これ以上話すと長くなる上に折角の合宿最終日だから暗い話はしたくない。

「上手く話を逸らされた気がするんだけど、結局長門にはまだ告白とかしてないのか？」
「してないよ」

……彼は私の気持ちには気づいているはずだ。けれど今の関係が壊れてしまうのが怖いのだと思う。疑り深いからきつと自分で導き出した結論だと正しいと断定ができないんだろう。

それに彼は極端に自己評価が低い。そういうのもあって自分に向けられる好意になれていないんだ。だから私から行かないとダメなんだ。

「もう私眠くなっちゃった」

「そうね、明日も早いし今日はもう寝て明日も励もう！家に帰るまでが合宿よ！」

「へーい」

「消灯！」

俺は一人でササつと入浴を済ませある部屋へ行き、部屋の扉をノックする。中から「どうぞ」という声が聞こえたので扉を開けて入っていく。

「最終日だからもういいかと思って片づけたのだけれどここに来たという事は明日も使うのかしら？」

「いえもう使いません、合宿中わがまま言っただけで使わせてもらい感謝しています。それとは別件で一つお話がありました」

俺のやるべきことは安芸先生にあることを聞きに行くことだ。確かについでに備品のお礼もしに来たけれど。すると安芸先生は意外だったのか驚きながら問いかけてくる。

「あら、一体何かしら？そろそろ寝る時間よ？」

「直ぐに済むかどうかは保障しかねますが、先生には俺が考えたとある世界についての仮説を聞いて意見をお聞きしたいんです」

先生が目で続きを促したので俺は自分が考えていた世界の秘密について話す。

「俺がまず疑問に思ったことが、西暦の色々な書物を読んだ時です。神話が書かれている本を読んだときにふとこう思いました。なぜこの世界の守り神である神樹は土地神様でしか形成されていないのかと。天に属する神々は一体この世界で何をしているのか。その時はまだ、引つ掛かりを覚える程度でした。それに親が勤めていた【大赦】中々使われない赦すゆるという文字が使われている。普通の人はそんなに気にしないかもしれないませんが、生憎俺は普通じゃないですから。何を赦した若しくは何かに赦されたからと言うのが名前の由来として可能性が高い。前者は絞れませんが後者は別です。人間が赦しを請うものなんて数えるほどにしかありません」

「それは世間にも出ていることよね。あなたがこのタイミングで聞いてきたということはまだあるのかしら？」

「その通りです。俺は乃木家の養子になりお役目に選ばれたことで入ってくる情報がさらに多くなりました。人類の敵、ウイルスにより生み出された化け物——バーテックスです。バーテックスには『頂点』という意味があるそうですね。バーテックスがしゃべるわけありませんからおそらく命名は大赦でしょう。何故人類の敵とあろうものに頂点の意味の名前を付けたのか。それにいくらウイルスの突然変異で知能があるとはいえ、“何故か”神樹を執拗に狙ってくる。知能があるとはいえ戦闘を見る限りそこまでの知能はないと思いました。それにただの謎の生き物にたどり着かれて神樹がそう簡単に力を失うとも思えません。そして元来人間はその傲慢さゆえに生物の頂点にいたいと思ひ込んできました。そんな人間でも畏怖してしまうものなど一っしかありません。『神』です。先ほど天の神々は何をしているのかと言いましたが、神話では神々も争いを起こしたりするものだと思いますね」

「つまりあなたはその天の神々がバーテックスを仕向けて神樹様を攻撃していると言いたいのかしら？」

「ええそうです。ですがそれだと何故神樹が結界を張って人間を守ってるかが分かりません。神々の抗争なら人間を挟む必要はないんです。ですがもし神々の抗争の原因が人間にあるとしたらどうだろうと考えました。流石になぜ人間が目をつけられたかまでは分かりませんが天の神々は人間を滅ぼすことにした。ですがここで人間に味方す

る神々も出た。それが今の神樹を形成している神々。ウィルスにより人口と領土が減少したのではなく、天の神々が今と同じようにバーテックスを差し向け、神樹の結界の範囲内である四国は生き残りそれ以外がなくなってしまうた」

「なるほど。けれどそれだけではあなたの想像でしよう？」

「そもそも勇者システムがこんな都合よく用意されているのがおかしいんですよ。あれほどの技術がぽつと出に出来るはずがない。それは俺たちよりも前にバーテックスと交戦した勇者がいる証明です。そしてもしバーテックスが神に造られたものなら無尽蔵に湧いてきてもおかしくない……つまりこのお役目には終わりがいい。拙い仮説ですがこんな感じですよ」

俺の想像もかなり入っているが、俺の考えは話した。拙い理論だし大体一介の小學生が思いついたことだ。真実ではないと思う。それでも事情を知っているであろう大人の反応が見たかった。

就寝時間前に乃木君が来たと思ったら仮説を話し始めた。

途中途中に穴はあるものの本質は正しいものだったので私は動揺を隠すので必死だった。彼は拙いと言ったけれどそんな事はない。何せ今まで一般人には隠し通していると思つた真実にたどり着きかけているのだから。彼は私以外には話していないだろうか。でも彼のリスク計算はすごいから一応私を信用に足る大人として話してくれたのだと思う。ここで誤魔化そうと思えばできる。確固たる証拠はないから杞憂だと言つてしまえばそれで終わる。

…… それだと私の動けない樹海化中に壁の外へ出てしまふだろう。どっちにしても詰みなのだ。彼がこの世界に疑問を持ちお役目選ばれた時点で。だから私は――

「…… 1つ聞きたいことがあるわ。あなたはそれが真実だとしてどうするつもりなの？」

これは問わなければならなかつた。他の勇者たちに話してしまつたらおそらくお役目に支障をきたすから。むしろその仮説を立てながらも普通にお役目をこなしている彼の精神は異常だ。

「たとえ世界がどうであろうと、俺のやることは変わらず彼女たちを守り抜くこと。それに大赦の事は恨みませんしそれしかやりようがなかったのかもしれないのも事実です。すからね。何体バーテックスが来ようともその分だけ追い返せばいい話です」

彼は世界の真実を知っても戦い続けると言ったようなものだ。その精神力と強い思いが男でありながら勇者に選ばれた理由の一つなのだろう。

「そう。これから話すことはすべて真実、信じきれないならいつか壁の外へ出てみなさい。樹海化中なら大赦も全ては監視出来ないでしょうから。先に答え合わせをするとあなたの仮説は大体合ってます」

「やけに素直に言いましたね。大丈夫なんですか？」

大赦の人間である私が隠してたことをあつさりバラしてもいいのかと言う意味の確認だろう。だがどちらにしてもバレてしまうなら隠す必要もない。そう言うとき彼は納得したようだ。

「俺としては話してくれるとは思ってなかったので良かったです。聞きたいことは聞け

ました」

彼はそう言いながらこちらに頭を下げ、失礼しましたと言つて部屋から出ていく。

先生は俺が壁の外に行くものだと思つて話を進めてくれたが、俺自身は行く気はなかった。園子にはどう隠れてこそこそ行つてもバレてしまうような気がしたからな。そして俺は先生の部屋を出た後小さく呟く。

「もしかしたらあの夢は……」

俺は最近、というかお役目が始まってから決まつてある夢を見ている……がとりあえず今日はもう寝よう。頭を働かせすぎた……

ともだち

1+1+1+1+1を4ではなく、10にする。

私達なら、出来ると思った。そうしなくてはいけなかった。

敵の名前はバーテックス。ウイルスの中で生まれた忌むべき存在。

これを退けるために。

でも、そんな存在に、バーテックス……頂点という意味の名前をつけるだろうか？

この時はまだ、バーテックスが■に■られたモノだとは知らない。

勇者御記 298年 乃木園子記

俺たちのお役目の訓練のための合宿は長かったようであつという間に終わり、帰りの

バスにみんなが乗るのを待っていたのだが……

「遅いつ！」

「なんかデジャヴだな……」

行きと同じように園子は俺の肩によりかかりながら寝ていて銀が遅れ鷺尾さんが怒っている。すると申し訳なさそうに銀が入ってくる。

「ごめんごめん、野暮用で……」

「野暮？」

鷺尾さんは訝しそうな表情を浮かべる。そして銀がにやけながらこちらを向く。

「で、長門はいつまで園子を撫でてるんだ？」

「ん？あぁ、つい癖で」

小さい頃一緒に寝たり、庭で寝転がると園子がいつも先に眠たそうにしていたのでよ

く頭を撫でてやっていたからその時の癖が抜け切れてないんだろう。

そうしているとバスが動き出し俺たちはそれぞれ帰路に着いた。

「ぎりぎりセーフ！」

「セーフじゃありません」

いつも通り三ノ輪さんは遅刻して先生に出席簿で軽く頭をはたかれる。

三ノ輪さんは遅刻が多すぎる。けど理由を話そうとしないし……何か事情があるのかもしれない。

その時三ノ輪さんのランドセルから猫が出てきた……なぜ猫？怪しすぎる。休み時間になり私は三ノ輪さんを調査することに決め乃木さんに協力を煽る。

「なぜ三ノ輪さんの遅刻が多いのか。やはり何か理由があるのよ。それが分からないならこつちから探るまで！乃木さんも協力してくれる？」

「すび……」

乃木さんが船を漕いでるのを見て私は了承とみなした。なんだか乃木さんの扱い方がわかってきた気がする。

そういうえば乃木君は？ 教室内を見渡すと三ノ輪さんと何やら話していた。

「平日は無理だけど日曜とかなら空いてるし手伝うよ」

「いいって！ 迷惑だろうし」

「俺がやりたいんだよ。一応知ってる身としては放っておけないしな」

「そこまで言うなら…… 頼むよ」

流石に最初から聞いてるわけじゃなかったので会話の詳細はよく分からないが、やはり三ノ輪さんには何かしらの事情がありそうだ。これだけではそれが何かは分からなかったけれど。

日曜日、私は乃木さんを連れて三ノ輪さんを調査することにし、手始めに家へ行くこ

とにした。

「そろそろね。三ノ輪さんの家に到着するわ乃木さん……っであれ？」

振り返るとさつきまで後ろをつけてきた乃木さんが居なくなっていた。

「アリさんだ〜！へいへい元気〜？」

声がる方へ行くとアリの行列に手を振っている乃木さんを見つけたので引きずっていく。

ようやく三ノ輪さんの家に着いた。

「ここが三ノ輪さんの家ね。えつとまずは……」
「ピンポンダツシュ〜？」
「そんな恐ろしいことはだめよ！」

私は家にあつた手ごろなスコープを持ってきたのでそれを使い中の様子を見る。

「おい泣くなつて。泣いていいのは母ちゃんに預けたお年玉が返つてこないと悟つたときだけだぞ?」

「ああぐずり泣きが始まつてしまつたあ。ミルクやおしめじやないだろうし」

すると三ノ輪さんは持つていたガラガラを使い弟らしき赤ん坊をあやしていた。

「泣き止んだ! えらいぞマイブラザー! 大きくなつたら舎弟にしてこき使つてやる。ニヒヒ」

しばらく様子を見てみると学校に連れてきていた猫がやつてくる。捨て猫を拾つたんだらうか。

「おお。お前もこの家になれたか?」

「銀一。食材が心もとなかつたから買い足しに行くぞー」

今の声つて……乃木君よね。教室で手伝うだとかいう話はこれだったのね。それにこんなに小さな弟さんがいたのね……世話が大変ということかしら?

すると唐突に乃木さんが

「わっしーそのスコープ下げて！」

「え、ええ。下げたわ。どうかしたの？」

「なつくんはねー気配に敏感だからそれすぐ見つかってしまうと思っただよー」

私は合宿での彼の鍛錬の時を思い出した。確かにあの時彼は私の気配にすぐ気づいていた…… スコープで覗くのは諦め中の声だけを聴く。

「長門？どうしたんだよそんな外の方を見つめて」

「いや、誰かに覗かれてる気がしたんだけど…… 気のせいだな。買い物行くか」

どうやらバレてはいないようだ。2人は買い物へ行くようなので私たちも後をつけるため乃木さんに声をかける。

「…… わっしー。なつくんにはバレちゃったみたい。でも見逃してくれるみたいだよー」

え？でも彼は気のせいって……乃木さんは「アイコンタクト」と言う。2人はそんなことも出来るの!?!?……兎に角2人の後を追う。

2人を追跡していると祝勝会で来たイネスの近くに着く。買い物はイネスですね。

「あ、わっしー見て見て！」

乃木さんが指さしたのは乃木君と三ノ輪さんがお爺さんに道案内をしている姿だった。

「道を探ねられたのかしら？」

すると次は女性に道を教えていた。2人とも優しいわね……

「ミノさん優しい〜」

イネスの駐輪場まで来ると

「わ〜自転車起こしてやるよ〜」

乃木さんの言うように2人は倒れていた自転車を起こしていた。

その後も三ノ輪さんと乃木君を追うと2人は次から次へとトラブルを解決していく。

「次から次だよ〜。ミノさんって事件に巻き込まれやすい体質なんだね〜」

勇者だからかしら？ようやく2人が目的地であろうイネスに入っていくので追う。

「次は迷子だよ〜?」

三ノ輪さん達は親御さんとはぐれてしまったのだらう女の子の手を引き連れていく。

「けんかの仲裁?」

男の子と女の子の喧嘩を乃木君が引き留め三ノ輪さんが事情を聴いている。

今度は客の一人がカバンからこぼした果物を拾うのを手伝っている。これは巻き込まれているというより……

「放っておけないのね。もう見てられないわ、三ノ輪さん！乃木君！」

私達2人も手伝いに入ることにした。

「やっと来たか2人とも」

「え？須美!？」

「園子もいるんだぜ」

「ええ!?!どうしたんだよ2人とも……」

とりあえず昼ご飯を食べながらということ各々フードコートで買って事情を話している。銀も2人には事情を知られた方が動きやすいだろうし2人の尾行は敢えて見逃した。

「じゃあ、2人は家の前から見てたつての?……ええ、なんか恥ずかしいな……」

「恥ずかしくなんかないよ、偉いよ」

「いつも遅れる理由はこれだったのね」

「言ってくれば良かったのに」

始めは俺もはぐらかされていたけど推測で大体分かっていたのでそう言うとは方なさそうに話してくれたのだ。今日も遠慮されたが事情を知っているのに手伝わないのは嫌だったので手伝いを申し出た。

「それは何か他の人のせいにしてるみたいで。何があろうと遅れたのは自分の責任なわけだしさ。というか長門2人に気づいてたんだろ？」

銀はそう言つて俺にジト目を向けてきたので俺は悪びれずに返す。

「まあそりゃあんな気配隠さずに尾行されればな。2人には知ってもらった方が良くないと思つたから見逃したんだよ」

「昔からそういう体質なの？」

「ツイてないことが多いんだ。ピングとか当たったことないもん」

ん？俺と銀は周りの様子がおかしいことに気づいて辺りを見渡すとそれにつられて園子と鷲尾さんも目線が動く。

…… どうやら3回目のお出迎えのようだ。

「ほらな。日曜台無し」

「休みの日で良かったというべきか嘆くべきか……」

俺たちは勇者システムを起動させ大橋までいく。

「来たわ」

「ビジュアル系のルックスしてるなー」

「まずは私が…… これで様子を見る！」

鷲尾さんが弓を放とうとすると地面が激しく揺れ始めた。どうやらあいつが揺らし

ているみたいだな。

「うわ！なんだなんだ？」

「あのバーテックスのせい？」

「だろうな。厄介だな……」

鷲尾さんが気張って再び弓を構えようとしていたので肩をたたいて止める。

「そんなに気張るなよ鷲尾さん。特訓しただろ？4人で……な？」

「乃木君……」

「私たちと一緒にあいつを倒そう？」

「乃木さん……」

「合宿の成果を出す。そうだろ？」

「三ノ輪さん……みんな」

その時揺れが突然収まった。どちらも動ける状態になり、そして敵が何かしようとしている。これはまずいな。

「園子！盾を！」

「了解だよ〜！……うんとこしょ！」

敵が足で攻撃してくるが園子が前へ出て展開した盾ではじく。

「よ〜し、敵に近づくよ〜！」

「了解」

リーダーである園子の号令に皆返事を返し一気に敵に詰め寄るが敵は上空に飛んでしまった。さつきと同じ予備動作だ。みんな今回は余裕をもって躲す……が

「あれは……まずいな鷺尾さん！」

俺の声よりも前に準備していたのであろう、俺の声と同じタイミングで鷺尾さんから矢が放たれるが敵に届かなかった。これは悪い予感がする。攻撃を避けるためだけに上空に行ったはずがない。

制空権を取られるとこつちが後手に回るしかなくなる。非常にまずい。

「制空権を取られた!？」

「降りてこいこらああああ!!」

俺の感が警鐘を鳴らしている。敵の特徴はもちろんそのドリルのような脚……ドリル?もしかして

「何か仕掛けてくる……」

「銀! 斧を構えろ!!」

「っ!？」

俺の声のわずか後に敵が4本の脚をまとめてドリルのように回転させながら銀に攻撃する。当たる直前に斧を盾にしていたのは見えたがそんなに持たないはずだ。が残念ながら俺には打開策はない。

「ああああああああ!! 根性!!」

「ミノさん!」一分は持つ! 上の敵をやれえええ!! …… 私たちで敵を叩くよ!!」

「了解」

俺はリーダーの指示に短く返事をして刀を構える。俺には打開策はないが敵を落とすのは園子と鷺尾さんがやってくれるはず。だったら俺は出来ることをやる。

敵の脚と本体の間、そのつなぎ目のどこか。目的はあの回転を出来るだけ弱めて銀の負担を減らすのと現実への被害を減らすこと。

園子が槍で階段を作り鷺尾さんが昇って矢を放ったのを確認する。鷺尾さんの矢が当たる前。今！

「はあああああー！」

勢い良く跳躍し一瞬で数回同じ場所を斬りつける。4本あった脚の内3本のつなぎ目しか斬れなかった。けれど鷺尾さんの矢が本体を落下させる。勿論つながっている残り1本の脚は銀からそれで地面に刺さる。

「4本全部斬ろうとしたんだけどな。やっぱり無理か」

少なくとも今の刀と俺の技術じゃこれが精いっぱいだ。

「ここから出ていけ〜!!!突撃〜!!」

園子が槍を構えながら敵に突撃してこちらに飛んでくる。………なんかデジャヴを感じた。園子の槍を刀でいなして空いてる手で園子を抱きかかえる。

「銀！今だ！いけええええ！」

「ミノさん!!」

「碎けええええええ!!!」

「4倍にして返してやる！釣りはとつとけえええ!!」

銀が敵の元に跳躍して炎をまとった双斧を振りまわす。そして鎮火の儀が始まった。

「へへっ始まった」

「鎮火の儀」

「終わった……」

今回に関しては俺は何もしていない。近距離で戦えない堅い敵になると俺の出来ることはない……。まだまだ俺が弱い証拠だ。もっと強くなりたい、いやならなきやいけないんだ。勇者システムが弱いなんて言い訳にすらならない。だってそれならばあの夢の――

それよりも今は

「園子さんや、あれ俺じゃなかったら危なかったぞ」

「なつくくんなら受け止めてくれるって信じてたから」

「……そうか」

全面的に信頼されているというのは少し恥ずかしい。顔を逸らすが見えぬ園子にはそれも気づかれているんだろうな。今も視界の端でニヤニヤしているのが見える。

現実世界に戻った私達は大橋近くの公園の芝生に倒れこんだ。

「ああー。痛てて……」

「ミノさん大丈夫？」

「疲れたよ。腰に来る戦いだっただあ……」

「ああして攻撃を受け止めてくれたから私たちが攻め込めたんだよ。ありがとうねミノさん」

「そっちこそ凄かったじゃん」

「だってミノさんが一分持つって言ったから一分は持つじゃない？それくらいあればなんとかなると思うって」

ああ。先生は見抜いていらしたんだ。乃木さんのいざという時のひらめきを。乃木君もそれを分かかって身内びいきなどではなく彼女をリーダーに推薦した。私は迷っているだけだった。それなのに家柄のせいで乃木さんがリーダーに選ばれたと思いで……

大馬鹿だ。自分がしつかりしなくちゃって思ってたけど、ただ足を引つ張っていただけなんだ。それに合宿の時に乃木君に言われたのに三ノ輪さんを信じきれなかった。

「あーあ。お腹空いたー！」

「うどん食べてる途中だったもんね〜」

「でもイネスに戻るわけにもいかないしなー」

「……………うう……………ぐすつ……………」

鷲尾さんが急に泣き出した。もしかして敵から攻撃貰ってたのか!?

「どうした須美!?!どこか痛いのか!?!」

「バーテックスの攻撃貰ったのか!?!」

「……………ううん、違うの……………ぐすつ……………ごめんなさい。次からは始めから息を合わせる……………ぐすつ……………頑張る……………」

「うん。頑張ろうな！」

「はい、わっしー」

そう言って園子が鷲尾さんにがハンカチを貸す。

「ありがとう…… そのうち」

その言葉に園子と銀は顔を見合わせて嬉しそうにする。

鷺尾さんがこの戦いで気づけて良かった。お役目は終わらないのだから…… そうだとしても俺は必ず3人を無事に日常に返す。俺は決意を新たにす。

「もう一回言ってわっしー！」

「そ、そのうち……」

「おおく!!」

「アタシはアタシは!？」

「銀…… 「え？」 銀…… !」

「ははは、嬉しいなあ、なんかようやく須美とダチになれた気がする」

「なつくんは!？」

園子が聞くと鷺尾さんは少し困った顔をする。おい園子さんや。俺は男子だし園子があだ名なら俺は苗字でいいでしょうよ。

「園子、鷺尾さんも困ってるし……」

「…… 長門君」

「む、無理しなくていいんだぞ鷺尾さん？」

「無理はしてないわ。だから長門君も私の事名前で呼んで……」

まあ本人に言われてしまったらそうするしかないな。

「分かったよ須美」

このお役目を通して改めて4人ならば1+1+1+1を10にすることが出来ると思っただ。